

講演＆ワークショップ  
「伝える」を「伝わる」に変える 開催報告

日時：2020年1月23日（木）19:00～21:30  
場所：みえ市民活動ボランティアセンター（津市）  
講師：桑山知之さん（東海テレビ放送 報道部）

今年度第4回目の気づき合う講座「ダイバーシティ・スイッチ」（主催：三重県）を開催しました。当日は、企業、行政、NPO、個人などさまざまな51名が参加し、講座『「伝える」を「伝わる」に変える』とふり回りワークショップを通して、ダイバーシティについて考えました。



東海テレビ放送制作CM  
見えない障害と生きる。  
▼動画はこちら  
<https://youtu.be/hFpPNU0ONQo>



「伝える」と「伝わる」の違いって？

当日は東海テレビ放送報道部 記者・ディレクターの桑山知之さんから『「伝える」を「伝わる」に変える』のテーマで講演をしていただきました。桑山さんが制作したCM「見えない障害と生きる。」は発達障がいテーマに当事者や周囲の想いを丁寧に伝え、大きな反響を呼びました。

当日はその映像を交えながら、報道記者の視点から世の中にまだ深く理解されていない課題を、身近に、自分ごととして伝えるための工夫をお話いただきました。

参加者の感想より

- 発達障がい当事者ですが、当事者の立場でも意見が出しやすかったです。
- メディアからの目線と一般からの目線を学ぶことができました。
- グループで話した時、それぞれの経験や考えが聴けて参考になったし、新鮮でした。
- 物事の捉え方が変わりました。

感想や経験をシェアすることで気づく

講演後のふり回りワークショップでは、池山敦さん（皇學館大学教育開発センター准教授）が進行しました。参加者はまず講演の感想と講師に聞いてみたいことを5～6人のグループになって話し合いました。その後、質問を書いた付せんを集め、桑山さんに質問に答えていただきました。

また後半は『これまでの伝わらなかった実体験をどう「伝わる」に変えていくか』というテーマでグループ内で話し合いをしました。最後は『「伝える」を「伝わる」に変えるには』を各参加者がワークシートに記入していただきました。

「ワークシートより」  
伝えるを伝わるに変えるには？

「伝わる」と思わずに相手に常に伝わるための工夫を続ける

本当に伝えたい事を素直に、シンプルに。愛をもって。

相手に合わせてシンプルに！

違いを理解する  
自分を知る！！  
（目）↓  
◎ 伝わる言葉や手法が見える◎

ダイバーシティ・スイッチ2019 とは…

「ダイバーシティ (diversity)」は日本語に訳すと「多様性」。三重県では、一人ひとりが尊重され、多様性が受容され、違った個性や能力を持つ一人ひとりがよい意味でお互いに影響し合うことで、相乗効果を社会に生み出す「ダイバーシティ&インクルージョン」の意味も込めて「ダイバーシティ」の言葉を使用しています。「スイッチ」は「切り替え」という意味です。社会の中のさまざまな多様性を感じる講座を通して、自分の中の価値観や他者との違いに気づき、他者を思いやることのできる多様性社会に切り替えていく、気づきの場として「ダイバーシティ・スイッチ2019」（全4回）を開催しています。



# 講演『「伝える」を「伝わる」に変える』概要版

講師 桑山知之さん（東海テレビ放送 報道部 記者・ディレクター）

1989年愛知県名古屋市生まれ。慶應義塾大学経済学部在学中からフリーライターとして活動。2013年東海テレビ入社後、東京支社営業部を経て、報道部で遊軍記者/ディレクター。2018年からドキュメンタリーCMのプロデューサーを務め、「いま、テレビの現場から。」(ACCブロンズ、ギャラクシー奨励賞)や、「見えない障害と生きる。」(2019年日本民間放送連盟賞CM部門最優秀賞、ACCゴールド受賞)を制作。



## 「伝える」を「伝わる」に変える

平日夕方の情報番組と、去年からドキュメンタリーCMのプロデューサーを担当しています。ドキュメンタリーCMは年1回制作する局の報道姿勢を示すもの。去年制作した「見えない障害と生きる。」は発達障がいテーマにしました。僕がこのCMで伝えたかったことは多様性です。CMに出てきた当事者の方は、みんな素敵でかわいく見えませんでしたか？お笑いでいう“おいしい”や魅力的に感じる“かわいい”という価値観って大切だと思っています。そんな思いがきっかけで制作しました。さてみなさんは、普段伝えたいことをどのように伝えていきますか？僕は**伝えたいことは球体（誰が見ても同じ形）**ではないと思います。本当はいびつで、例えば円柱のように横から見たら四角、上から見たら丸…と色んな見え方がするのではないのでしょうか。

## よく陥りがちな“伝わらない”伝え方

僕の経験などから3つのパターンをお伝えします。

### ①「深夜に書いたラブレター」パターン

深夜に書いたラブレターって、翌朝冷静に読み返すと気持ち悪い。相手の気持ちを無視した一方通行になっていたりします。情報をやたら詰め込みすぎて、伝えたい核の部分が見えにくくなることも。そのため魅力が全然伝わらず、相手に**メリットがない**と思われるのです。

### ②「結局、他人事」パターン

聴いた相手が「ふーん」で終わる話ですね。相手は「**私どうしたらいいの？**」と。相手の心に響いていないから、個々の行動に直結しない。原因の1つは、**前提知識や時間軸が相手とズレているから、何の話をしているのか分からない**ということ。また話を一般化できていないと相手に嫌悪感を持たれることもあり、注意が必要です。

### ③「橋渡しゼロ」パターン

話題と話題を橋渡しする接続語みたいなものが欠けると、話が全然つながらず、**個々の話は理解できるが、納得できない**となります。原因の1つは、**論点があちこちにあるから**。背骨がぐらぐらで、結局何が言いたいのか相手に分からない。また**ストーリーがない**と、物語に引き込まれない。山があるのは谷があるからです。泣ける映画はどこかに高低差があります。アップダウンを意識的につくることでより伝わりやすくなります。

それでは、後半はテレビの現場でも実際に使っている“伝わる”手法を3つ紹介していきます。

## テレビマンの“伝わる”手法

### ①大切なことは先に言う！でも…

**大切なことは先に言いましょ**。ニュースの基本構成は、逆三角形。何のニュースかを冒頭に伝え、徐々に情報の要素が減っていくイメージです。でも**枠づけ（ふり）は必須**です。人は原則、自分以外には興味がない。だから冒頭に自分と関係のある話だと匂わせます。よく使われるのは、旬な話、近所の話だということ伝える…など。そして**“削ぎ落す”ことこそが伝わるコツ**です。**伝えたいことは、基本1メッセージに絞ら**ましょ。

### ②受け取り手の心が動くストーリーを

まずは**「他人事ではない」と**思わせること。「見えない障害と生きる。」では、最初に「片づけられない女性」の話を出しました。それは片づけられないことは誰もが身近な話だからです。また受け取り手の心が動くストーリーづくりという点では「文字の読めない教師」のパートは苦しさの実態を描く谷の部分です。またできるだけ簡単な言葉で「**小さな子が見てもわかる**」ことも重要です。発達障がいの子どもを持つ家族のパートで「ゆっくりだけど、みんな学んでいる」というコピーがあります。子どもだけじゃなく親もみんなが学んでいるということ。色んな立場の人の心にひっかかる表現を意識しました。

### ③“当たり前”を疑う

発達障がいを扱うとき「障害者が努力する姿を感動的に取り上げる」というよくある描き方とは別の視点で描きたいと思いました。これまでの話と逆行しますが、わかりやすさを追求しすぎないことも大切です。世の中にある**“当たり前”を疑い、裏切る**ことで、これまでの価値観やルールを変えられると思います。そのためには**パワーワードで新しい概念をつくる**ことも必要。CMの中のラップで「僕とあなたの中にある障害は僕だけのものではない」という言葉があります。障害という言葉がダブルミーニングになっていて「自分と社会との間の壁、それが障害なんじゃないか」と僕自身が気づかされました。新しい価値や概念を作っていくときには**「数字は嘘をつかない」**を利用しましょ。データや数字を入れることで、ズームアウトするようにミクロからマクロに視点が変わり、一般化させることができます。

桑山さんのテレビ報道の現場の話には、ダイバーシティなどの新しいテーマをどう世の中に浸透させていくかのヒントがたくさん見つけられました。